

「農家手取り最大化プログラム」による人材育成

——群馬県JA前橋市——

研究員 長谷 祐

全農が全国55のモデルJAと進める「農家手取り最大化」の取り組みでは、トータル生産コストの低減、大規模営農モデル実証による経営改善とともに、JA職員の人材育成も企図されている。

モデルJAの1つであるJA前橋市(以下「JA」)では、2018年から「農家手取り最大化プログラム」(以下「プログラム」)を進めている。当然、これは農業者の所得増大を目的としているが、JAと全農では、実践手法を工夫することで職員の人材育成にも活用している。

プログラムでは、ナス・ネギ・ブロッコリー・加工キャベツ・タマネギを対象にいくつかの施策が掲げられており、なかでも①肥料の最適化、②農薬の最適化、③匠の技伝承を3つの柱としている。

以下では、この3つの柱の内容、およびJAによる人材育成の取り組みを紹介する。

1 肥料・農薬の最適化

肥料の最適化は、土壌分析をおこなったうえでカルテを作成し、最適な施肥を提案するものである。ただし、土壌分析はこれまでもJAが実施してきたものであり、目新しさはない。

しかし、これまでと異なるのは、これを「提案」活動として実施している点である。JA職員(営農渉外担当)は、対象となる生産者の土壌分析の結果をもとにカルテを作成、最適な施肥を考えるだけでなく、それを生産者のもとへ出向いて説明・提案する必要がある。

農薬の最適化についても同様に、JAが防除暦を作成して、必要な農薬の一覧表を生産者に提示している点はこれまでと変わらない。

ここでもJA職員が、生産者のもとに出向き、それぞれの生産者にとって本当に必要な農薬を説明・提案する活動を実施している。

2 匠の技伝承

匠の技伝承は、「勉強会を通じて、篤農家の技術(匠の技)を中堅生産者に伝える取り組み」である。

これまでJAや生産者も感覚的にしか理解していなかった、篤農家の持つ技術や栽培上のポイントを「見える化」して、それを管内の中堅生産者に伝えることで、技術向上につなげようというものである。

匠の技伝承の参加対象となるのは、それぞれの品目で栽培経験が5～10年程度の中堅生産者である。まず中堅生産者から参加者を募り、彼らの栽培上の悩みを聞きとる。

次いで、その点について、JAと県域担い手サポートセンターの職員が篤農家のもとでヒアリングを実施する。ヒアリング結果はJA職員により、文字や画像として資料化(見える化)される。

勉強会では、この資料を教材にして、JA職員が講師となって座学がおこなわれる。その後、グループワークで参加者間の意見交換や、それぞれの取り組みについて話をしてもらう。JA職員もグループワークに入り、参加者と悩みや課題を共有する。

勉強会後は、JA職員が参加者の実践状況をフォローし、効果の検証や新たな課題の掘り起しをしている。

参加者からの評価は高く、彼らの多くが学んだことを実践している。JAでは今後、対象



匠の技伝承勉強会でのグループワーク

品目の拡大やカリキュラムの充実を図っていく。

3 職員の意欲醸成のためのワイガヤ

以上の3つの柱の実践では、JA職員が主体的に活動していることが特徴となっている。肥料・農薬の最適化では提案活動として、土壌分析の結果や防除暦を参考に、各農家に出向いている。

匠の技伝承でも、篤農家を講師に呼ぶのではなく、JA職員が篤農家にヒアリングを実施し、それを資料化したうえで、参加者に伝えるような仕組みになっている。

JAでは、こうした主体的な活動を通じて、職員の資質向上を目指しており、それがまたプログラム全体の推進に好影響を与えている。

一方で、人材育成を進めるには、育成される側の職員の意欲も重要となる。この点についてJAでは、全農からのアドバイスを受けて、若手職員の集いである「ワイガヤ」を開催している。

ワイガヤは月に2回程度開催される勉強会で、JAの若手営農渉外担当職員が参加する。JAでは管内を5つの営農エリアに区分しており、各エリアから参加者が集まってくる。役席者は参加せず、若手職員がその名のとおり、ワイワイガヤガヤと自由に発言できる会である。

ワイガヤの事務局は本所の営農サポート課



活発な議論が行われる「ワイガヤ」

が担うが、各回のテーマ設定や日程調整は参加者が自主的にこなす。また開催場所も支所やほ場など様々である。

それまで、エリアによって意識に差があった若手職員であったが、その垣根を超えて交流することが刺激となり、意欲の醸成につながっている。

また、ワイガヤでの議論の内容は半年に一度、役員へ報告される。このなかで若手職員から提案がなされ、実現した取組みもある。自分たちの意見が通るということが、さらなる意気込みにつながっているという。

4 育つ環境を提供する

JAでは、ワイガヤでの意欲の醸成とプログラムへの主体的な参加を通じて、人材育成を進めている。

この取組みが開始されて1年しか経過していないものの、若手職員からの提案や、匠の技伝承が生産者から評判を得ていることなど、すでに成果が出始めている。

特にワイガヤは、JA職員の意欲向上と主体的な参加のきっかけとなる活動であると言える。ワイガヤでは、JAは勉強会という機会と場を提供したのみであり、その中身は参加者に任せられている。「仲間とともに刺激し合える環境」を整えることが、人材育成をするうえで肝要であると言える。

(ながたに たすく)